平成２６年度病院医学教育研究助成成果報告書

報告年月日：平成27年4月10日

研究・研修課題名	がん薬物療法後のケアに対する地域連携の推進
研究・研修組織名（所属）	島根がん地域連携研究会（腫瘍・血液内科：総括責任者：鈴宮淳司）
研究・研修責任者名（所属）	若槻　律子（看護部）
共同研究・研修者名（所属）	槇原貴子（医療サービス課） 江角清美（看護部） 清水美保子（看護部） 金子　栄（皮膚科） 百留亮治（消化器外科） 高橋　勉（腫瘍・血液内科）

目的及び方法、成果の内容

目　的

島根県はがん薬物療法を実施できる施設は限られており、当院にも遠方から治療を受けにくる患者が多い。がん薬物療法は骨髄抑制をはじめとした様々な副作用が出現するため、治療後のケアが重要であるが、拠点病院ですべての患者に対応するのは困難である。我々は平成 23 年度より骨髄抑制に対しての G-CSF 予防投与クリニカルパスを開発し、かかりつけ医と連携を行い、成果を挙げている。G-CSF 投与以外のケアについてもクリニカルパスを開発し、かかりつけ医と連携することによって、患者により良質なケアを提供することが目的である。

方　法

本研究の目的を達成するために以下のような方法を段階的に行っていくことにする。

１．昨年度にかかりつけ医、訪問看護ステーションとの連携を強化、患者自身のセルフケアの向上を目的とした「患者日記」を作成したので、それを運用し、効果を評価する。

２．がん薬物療法後の副作用の一つである皮膚・粘膜障害に対する地域連携クリニカルパスを開発する。

３．かかりつけ医、訪問看護ステーション、ソーシャル・ワーカーなどを対象にしたがん薬物療法後のケアに関する勉強会を実施する。

４．がん治療における地域連携を推進している高知医療センターの視察を行い、よりよい連携方法を模索する。

５．まめネットを利用した地域連携方法を検討する。

成　果

1．昨年度にかかりつけ医、訪問看護ステーションとの連携を強化、患者自身のセルフケアの向上を目的とした「患者日記」を作成したので、それを運用し、効果を評価する。

「患者日誌」は「療養手帳」と名称を変更し、腫瘍・血液内科の患者6名に使用した。「療養手帳」の運用方法を検討し、G-CSFパスの依頼があった患者に医師あるいは病棟看護師が使用方法を説明した。使用状況は様々であり、「療養手帳」の存在を忘れた患者、困った症状がほとんどなく記載しなかった、また記載して持参してもかかりつけ医に見てもらえなかった事例があった。しかし中には日々の体温、身体状況の記載を続け外来受診時医師に確認したいこと、診察時に説明された内容などの記載もあり活用を続けている患者家族もいた。(資料1-1，1-2，1-3)

「療養手帳」の内容について項目を増やしてほしいという意見もあり今後検討が必要であるが、使用数が少なく評価に至らなかった。

今後は、化学療法の薬剤指導と共に「療養手帳」を渡し説明ができることとしたい。また、同時にかかりつけ医の医療機関に「療養手帳」の利用について情報提供をおこなうことを検討したい。

2．がん薬物療法後の副作用の一つである皮膚・粘膜障害に対する地域連携クリニカルパスを開発する。

皮膚・粘膜障害に対する地域連携クリニカルパスの開発の情報収集のために、院内の皮膚障害で困っている患者の状況把握をすることとし、全診療科のがん薬物療法を実施している医師にアンケート調査を実施し73名より回答があった。(資料2)

その内、皮膚障害を起こしている患者の治療経験者は68%であり、40%の医師が皮膚障害の治療に困っていると回答があった。(資料3-1，3-2) また、治療に困っている医師は、抗体薬を使用する診療科が多かった。(資料4-1，4-2)

皮膚障害の治療に困っていない医師は、皮膚障害の症状に応じた薬剤を処方し、皮膚科との連携体制、ケア指導ができていると回答しているが、困っている医師は、薬剤の処方、皮膚科に紹介する基準、ケア指導ができていないと回答している。(資料5-1，5-2)

患者背景として高齢、独居などから患者のセルフケア能力と家族等のサポート体制に問題があると予測していたが、院内のサポート体制をよりスムーズに充実させることが必要であることがわかった。

がん薬物療法による皮膚障害の治療とケアのためのアルゴリズムを作成し院内で活用できるよう検討することとなった。また、今後外来での皮膚障害のケア指導ができるような看護体制を期待したい。

3．かかりつけ医、訪問看護ステーション、ソーシャル・ワーカーなどを対象にしたがん薬物療法後のケアに関する勉強会を実施する。

平成26年8月29日院内外の医療関係者を対象として、皮膚科金子栄医師を講師として、抗がん薬の皮膚障害について、がん患者家族サポートセンター主催で勉強会を実施した。

(資料6) また、平成27年3月17日に平成26年度がん地域連携クリティカルパス講演会に、腫瘍血液内科高橋勉医師が講師として、「がん化学療法後の好中球減少症に対するG-CSF投与の地域連携パスの経験」について発表参加した。(資料7)

4．がん治療における地域連携を推進している高知医療センターの視察を行い、よりよい連携方法を模索する。

高知医療センターで外来化学療法と地域連携について取り組まれていた腫瘍内科　辻　晃仁　医師が、神戸市立医療センター中央市民病院に転勤されたため、同院に視察先を変更し、平成27年2月20日に視察した。

辻　晃仁医師より以下の説明があった。

1. 外来化学療法と地域連携を進める上で、化学療法開始前にかかりつけ医を必ず決めておくことが重要である。
2. かかりつけ医との情報共有の方法として、手書きで患者に説明した内容を患者に渡し、さらに紹介状に添付し、カルテにもスキャナー取り込みをしている。
3. かかりつけ医に、副作用対策として、支持療法やインフルエンザなどの感染症対策を依頼している。
4. 紹介する患者が「化学療法を行っているがん患者」という特別な患者という意識ではなく、症状に応じて、検査、診察を実施し異常があれば紹介してもらい、紹介元の医療機関がすぐ対応することが重要である。
5. 「連絡ノート」は、医師が1分程度で記載できるものでなければ診療に影響がある。
6. 患者自身に、病院機能の役割分担を理解してもらい、受診のルールを守ってもらうことで病院の役割が果たせることとなる。
7. 化学療法中のクリニカルパスは運用していない。

地域医療連携センター米谷看護師長・今村がん相談員より5大がんパスの運用状況について以下の説明を受けた。

1. 平成26年度は48件の術後フォローのためのパスを運用している。
2. 兵庫県で作成された「連携ノート」を使用している。
3. 院内のパスの流れは、主治医からパスの導入について患者に伝えられ、地域連携センター看護師に連絡がある。パスの概略説明、かかりつけ医の確認と連絡を担当している。
4. 「連携ノート」は、外来受診時クラークが受け取り、外来担当医に渡している。

地域連携を実践している他施設の状況を知ることによって、かかりつけ医を確認しておくことと院内外においてそれぞれの職種の役割分担を明確にすることが重要であることが再認識でき、今後の当院での地域連携の方策について大変参考になった。

5．まめネットを利用した地域連携方法を検討する。

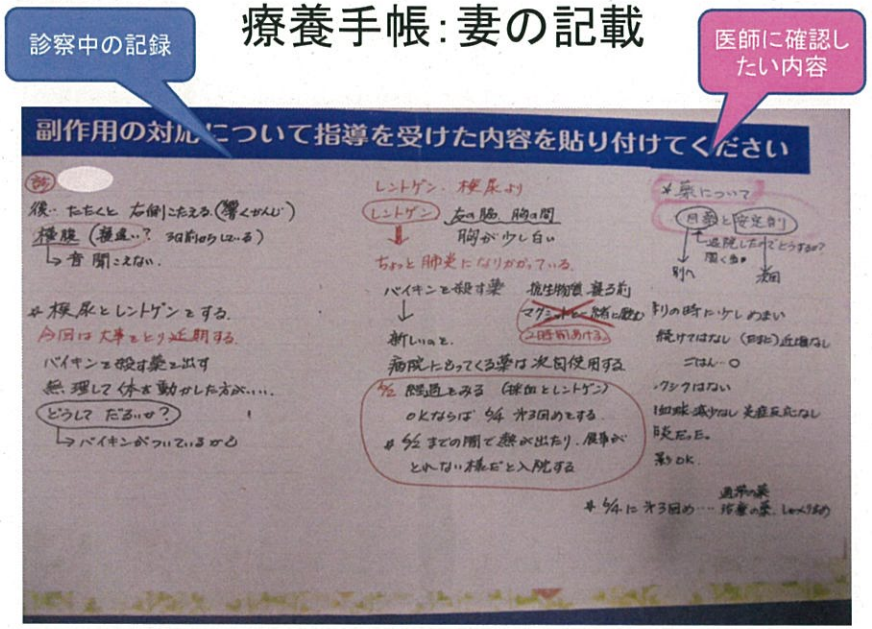
「まめネット」を活用した連携方法を検討するまでには至らなかった。「まめネット」の活用に関する情報収集とクリニカルパスの内容検討が必要である。

資料1-1

療養手帳：患者の記載

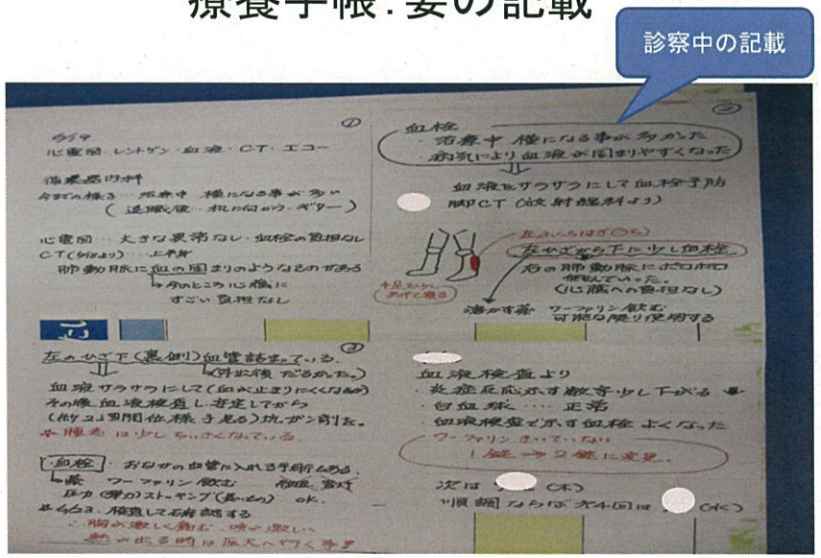
資料1-2

療養手帳：妻の記載



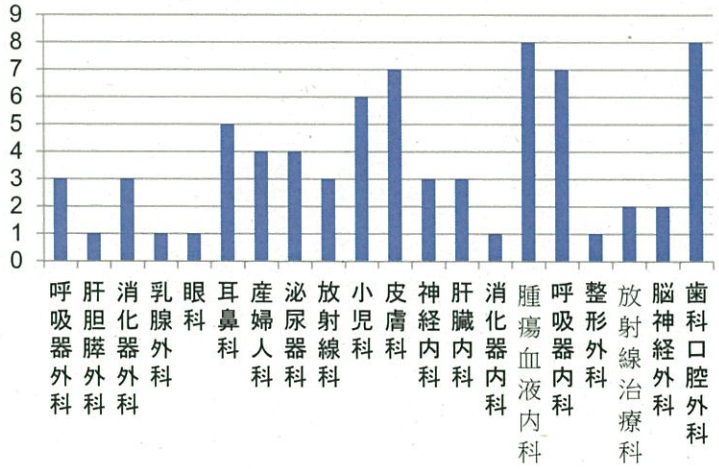
資料1-3

療養手帳：妻の記載



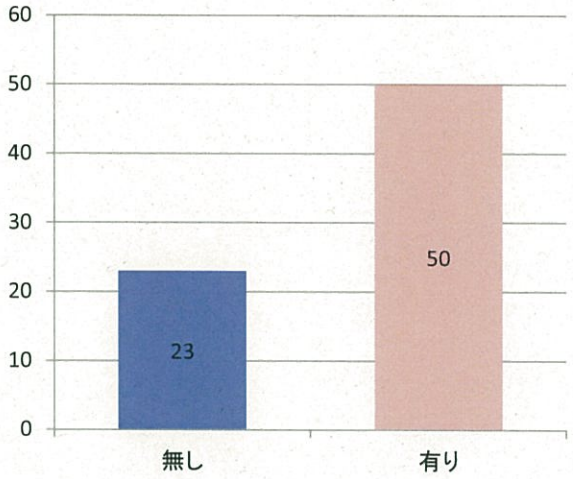
資料2

がん薬物療法実施している医師の診療科別状況　(n-73)



資料3-1

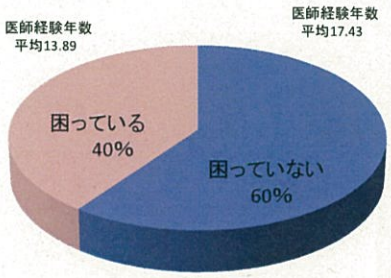
皮膚障害を起こしている患者に関わった経験がある医師 （n-73）



資料3-2

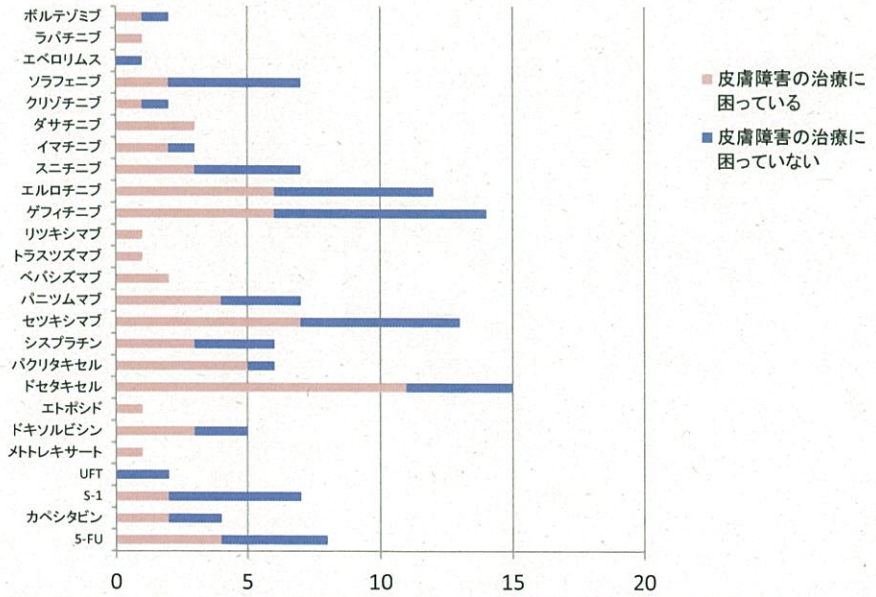
皮膚障害を起こしている患者に関わった経験がある医師で治療に困っている割合 （n-50）

	医師数	皮膚障害を起こした患者の経験数
困っていない	8	10人以上
	21	10人以下
	1	不明
困っている	10	10人以上
	10	10人以下



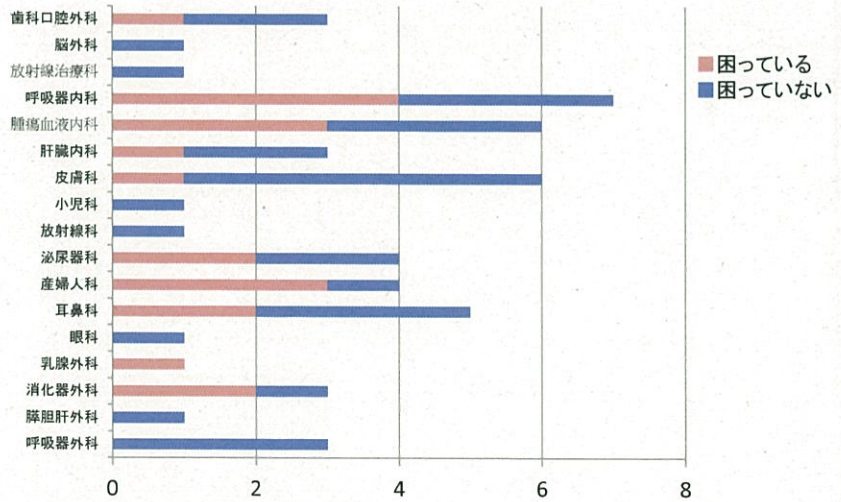
資料4-1

皮膚障害を起こした薬剤



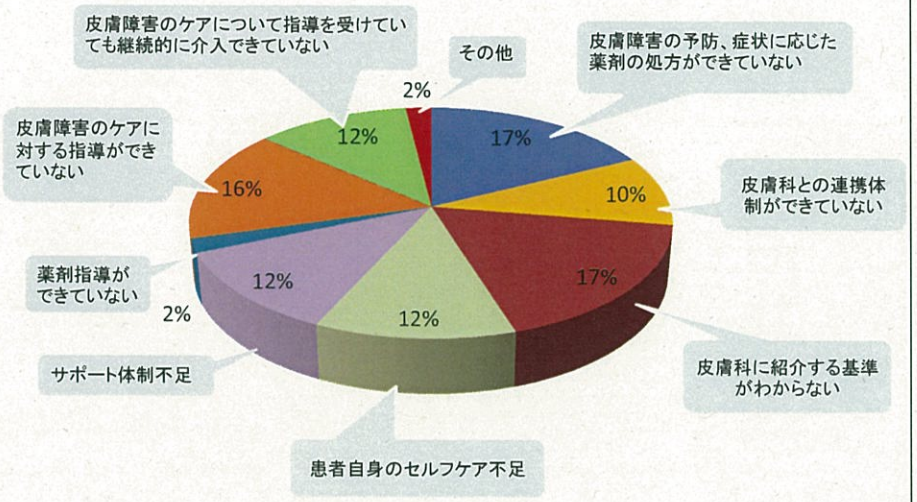
資料4-2

皮膚障害の治療に困っている医師の診療科別比較



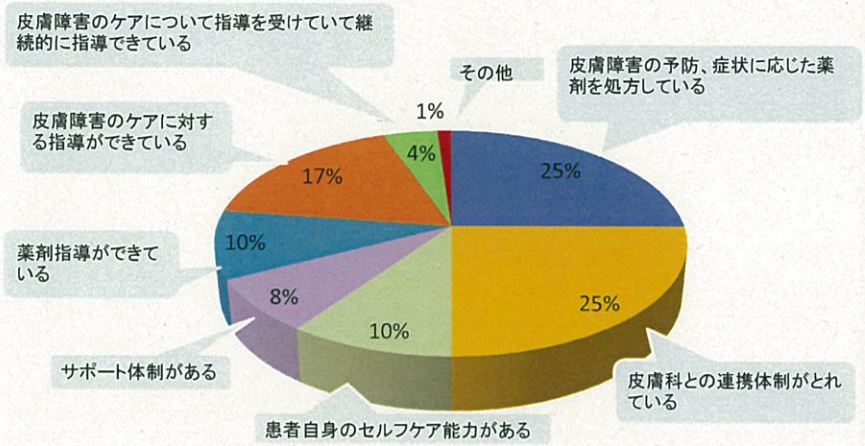
資料5-1

皮膚障害の治療に困っている理由



資料5-2

皮膚障害の治療に困っていない理由



資料6

勉強会

第25号　がん相談ニュースレター

がん患者・家族サポートセンター発行（H26.8.25）

がん患者・家族サポートセンターに寄せられる、がん相談の内容には、がん治療費の心配、告知後の不安、在宅における介護・看護の不安、治療により出現する副作用の心配が多く寄せられます。今回、抗がん薬治療副作用としての皮膚障害について理解を深めるため、がん相談勉強会を企画しました。みなさん、ぜひご参加ください。

H26年度
第1回　がん相談勉強会のお知らせです

テーマ：　抗がん薬の皮膚障害

講　師：皮膚科 金子栄医師
日　時：8月29日（金）18：00～19：00
場　所：ランチカフェレスト・ラパン
対　象：院内の医療スタッフ・院外関係者

※この勉強会は守秘義務が課せられているため、一般には公開されていません

参加者

医師	3名
看護師	10名
薬剤師	2名
栄養士	4名
MSW	4名
合計	23名

資料7

平成 26 年度がん地域連携クリティカルパス講演会開催要領

1　目的
「がん対策基本法」に基づく「がん対策推進基本計画」及び「がん診療連携拠点病院指定要件」が見直されたことに伴い、５大がんの地域連携クリティカルパスを平成２３年１０月までに整備することが求められた。
出雲圏域においては、平成２１年度にがん地域連携クリティカルパス検討委員会を立ち上げ、島根大学医学部附属病院、島根県立中央病院、出雲医師会が中心となり検討を進めた結果、平成２２年度に５大がん（肺がん、胃がん、大腸がん、肝がん、乳がん）の地域連携クリティカルパスが完成し、平成２３年度から実際の運用が開始された。
そこで、地域の医療関係者が、がん地域連携クリティカルパスに関する理解を深め、更なる普及を図るために、今年度のがん地域連携クリティカルパス講演会を下記のとおり開催する。

2　主催
がん地域連携クリティカルパス検討会議（事務局：出雲保健所）

3　日時
平成２７年３月１７日（火）１９：００～２０：４０

4　場所
出雲保健所(出雲市塩冶町 223-1)　大会議室

5　対象
出雲管内のがん診療に関わる医療関係者、保健福祉関係者

6　講演会内容
座長　島根大学医学部附属病院　腫瘍センター長　鈴宮淳司　教授
講演１　島根県立中央病院　総合診療科医長　今田敏宏氏
「島根県立中央病院におけるがんパスの運用と現状」
講演２　島根県立中央病院外科医長　杉本真一氏
「大腸がん診療の現状とがん地域連携クリティカルパスの運用」
講演３　島根大学医学部附属病院腫瘍・血液内科　助教　高橋　勉氏
「がん化学療法後の好中球減少症に対する G-CSF 投与の地域連携パスの経験」
講演４　医療法人医純会　すぎうら医院　理事長　杉浦弘明氏
「がん地域連携パスとまめネットの活用」

7　参加申し込み
参加申込用紙により、平成２７年３月１６日（月）までに申し込む。

8　その他
講演会に引き続き、平成２６年度がん地域連携クリティカルパス検討会議を開催する。（会場：出雲保健所）